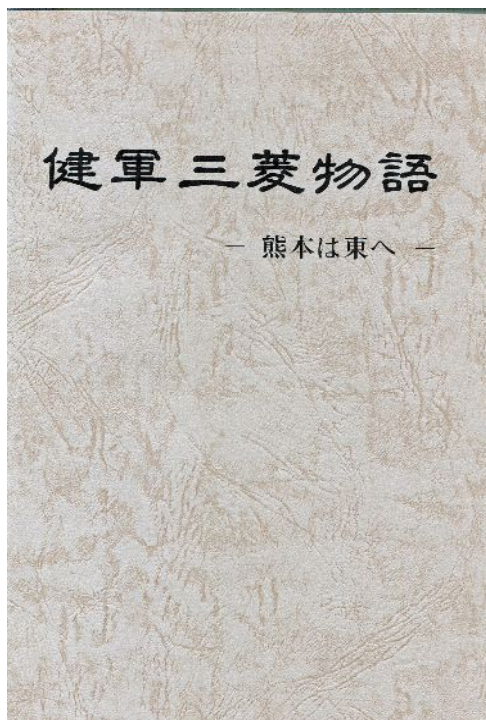


## 『健軍三菱物語』について



8町内公民館長 平川 寛

この本は平成元年に出版されましたが、著者は岡野允俊という人で、奥書に略歴が記されています。それによると現住所は愛知県小牧市、1929年生まれ、1956年三菱重工業・西部整理事業所を経て同社・名古屋航空機製作所に入社、1988年同社定年退職、主な著作に「飛行機野郎」「三菱名航・小牧南工場史」等あり。

戦時中の健軍町の様子は、この本に、ほぼ語り尽くされています。こういう名著が20年以上も前に出ていることを知らずにいたうかつさに忸怩たる思いがいたしますが、いまからでも遅くない、これは是非とも地域の人々に読んでもらわねばならぬと思いました。

そこで著者の岡野さんへ連絡をとりご本をホームページ掲載したい旨お願いしたところ、御快諾をいただきました。岡野さんは今年81歳になられるはず

ですが、まだまだお元気で三菱の航空機資料室の顧問のようなお仕事を退職後もなさっております。

この本に手記を寄せられた人々、一往時の青年男女―は当時の日本人のすべてがそうであったように、それぞれの戦後を生き抜いて、今老境に達しすでに鬼籍に入った方も多いたと思われませんが、これら父兄とも呼ぶべき世代の人々に私はこころから敬意を表すると同時に、岡野さんを始め本の発行に携わった方々へ感謝を申し上げる次第です。

さて、本の採録といってもまるごと一冊ではありません。それはページの容量に限度があつてできないことですから、どうしても私の主観による選別となりますが、当時の様子がよく分かる、を基準とします。

私は校区の歴史をしらべるに当たって江戸時代の竹宮村から始めましたが、往昔この地は田が少なく畑作に偏った地域で畑の周縁部には原野の残る草深いところでした。それは明治になり昭和に入っても同じでした。ところが米英と全面戦争に突入した昭和16年になって、突然、降ってわいたような巨大プロジェクトがここへ立地したのです。事業主体は陸軍、経営を任されたのは三菱重工業でした。

航空機産業というのは広い裾野の上に成り立つもので、何も無い九州の片田舎では生産に不利であると、三菱はもっと便のよい所への立地を陳情したらしいのですが、陸軍は頑としてそれを受けなかったそうです。それは陸軍が「健軍」という地名に拘ったためだと云う人がいます。当時新卒で三菱に採用され、いまも地元に住んでおられる方の記憶に、工場内でそのような話があったそうです。元寇以来の神風信仰があったとも思われませんが、おもしろい

話ですね。

実際はこれには諸説あったようですが、関係者の多くは、すでに故人となり、今となっては真相を詳らかにできません。しかしながら全然手がかりがないかといえば、そうでもなく、当時陸軍の関係部署にいた武藤章中将・囑託の森慈秀氏等いずれも県出身者で、この人たちが強力な誘致運動を展開したと云われています。

ともあれ、この時からこの地の歴史は大転回することになります。運命の賽は投げられたのでした。

歴史に、もし…というのは禁物ですが、それでもあのとき陸軍が別の場所に立地していたら…… 健軍地区の戦後は、ずいぶん異なったものになったはずで、現在のような人口密集地に発展したかどうか、私もこの地に住むことはなかつたかもしれません。そんなことに思いを馳せると、そこになにか運命的なものを思わずにはいられないのです。

著者の岡野さんは「往時を回想いただければ幸いである。」と序文を結んでおられますが、それは著者の謙遜であって、そんな軽い本ではありません。読後になにか重いものに触れたときの、胸のつまるような感動があり、物を思わしめる何かがあります。

この本の圧巻は学徒動員、女子挺身隊員等の手記のところ。「滅私奉公」という言葉は今日では死語となりましたが、その言葉のうしろにある精神性について考えてみるのは無駄なことではないでしょう。現代はあまりにも「わたくし優先」の世の中になってしまったのでは……。

ともあれ、この本には古い時代の美しい日本人が出てきます。その人たちは、高潔・純粹・剛毅・木訥で、現代人が忘れてしまった価値観を大切にしていました。歴史が曲がり角に差しかかっているといわれる今日、先輩たちの生きざまのなかに、なにか学ぶべきところがあるように思います。